整理番号

D－8－3　　114

標 題 名

稲虫防除俚諞

著 者 名

古市與一郎

発行者名

古市與一郎

発 行 年

明治 19 年(1886 年)

製作年月

2019年10月

寄贈図書
平野伊一氏

稻蟲防除俚諺

全

古市與一郎

植物防疫資料館図書之印
50年9月2日
植物防疫資料館

稻蟲豫防及駈除法の便謳緒言

髓蟲の稻を害するハ。唯白穗のみに止まらず。粃となり。實入りも惡しきよ。亦此蟲の稻莖へ蝕入るに因れり。蓋其害たる甚大にして。白穗の幾倍なるを知るべからず。實に恐るべき虫害なり。今其害の甚しき例を示さんに。髓蟲の雌蛾一ツを殺せバ。恰も收穫米七升八合九勺八才に對ふ。其計算ハ。髓蟲の雌蛾一ツに付き卵子百粒を産ものと見ればバ。其卵子孵化して。夏の土用前より害をなし。八月上旬頃より。其稻の莖の中にて蛹に化し又同月中旬頃より。再び化して白蛾となる。内五十八雄。五十八雌とし。此雌蛾一ツに付き。各

百粒づゝの卵子を産附るそーて。九月上旬頃より。其卵子孵化して。五千の髄蟲となる。一ツに付き。各稲一穂づゝ害をなすとせば。則五千穂なり。一穂百粒と見積れバ。五十万粒なり。之を拼法六四八二七を以て除れバ。前に所謂米七升八合九勺八才となる斯の如き計算なるゆ故に。諺蟲豫防駈除に盡力ーて。一ツの蛾をも。生ー置くことなく。目に觸れバ。必ず撲殺すべし。依て其経過の次第と。豫防駈除の方法に関る俚諺を作り。常に農家の婦女子をーて。田植臼擦り等に之を諳ハーめんとす

明治十九年四月下浣

古市與一郎誌

稲蟲豫防及駆除俚諺

古市與一郎著

○稲の髄虫名はいろ〳〵で根むし心むし葉乃むし

○へねを害するその髄虫ハふゆハ稲株わらはさきの

○わらやつなかぶ畔草などに髄虫かくれて住と知べき

○田畔路傍に枯草やくさいねを害するむしふせぎ

○虫害うけたるその稲わらハ柴乃代りに焚がよい

○むしをふせぐにや燕乃巣をばかけさせん家毎に

○燕ハ農家は大事の鳥よ草木害するむしをとる

○五穀作にハがいむしや葉のすで喰となるものな

○根むし蛹となりたる後は程なく蛾と化して出る

○ねむしてふくハ羽たゝみ細々長さ五六分いろ志作し

○根むしてふくハ昼間ハ潜れ夜ハ飛びあるきたまをうむ

○ねむし蛾のかゝるゝかたち苗殊日乾に竪にてふ

○根むしてふくハ見當り志だいひとつも殊さす殺さんせ

○ねむしの親ぐよそのてふくハ何で小麦が蛾になろ

○蛾が出たれバ田畑の不ゝで焚火ともしびしるがよい

○ねむしふせぎのとゝしびだびハ多ふいにこゞ入き油させ

○ねむし蚜のたまごを産むハすつハ子苗の葉ふ表に

○ねむしたまごをつ産こる形ち長さ五六分すぐ一分

○根むしたまご姓すじめハ黄いろ後に漸く黒くなる

○根むしたまごを見付しならバその葉ハとりやきすてよ
○ねむしたまごのかへり虫ハ稲のをかまハず内へいる
○根むし害をするさかりハときハ夏の土用にいるの頃
○いねハ中にて根虫ハ化て二度目蛹となるといな
○二度目さなぎより化したるてふハ稲の葉裏にたまごをうむ
○九月すゞめに根むしハたまごわれて再び虫となる
○二度目ねむしも初のごとくいね乃もとのまハ内へいる
○もとのまのうちより根むしハくきのなかへ喰いり進むな
○茎ハ中までねむしハずいをくらひのぼりきバ穂ハ枯て
○枯穂のいなぐき髄虫あまた居るを抜やきすてよ

○枯し稲茎ぬきとりせずバねむしや遠くひろがるぞ

○みいり散中に於て虫稲ハおよそ根虫れ害と知れ

右俚謳三十首稿成るの際偶愛知縣三河國南設樂郡新城村大田金十郎氏来り余が家を訪れ之を一覧して左の二首を即吟せらる仍て茲に附記す

○苗れ稲むし蕪にゑらせ立てやらんせ易やすみ

○まく農家ハ屢金返し物の蕪を大切にすし

明治十九年四月廿一日御届
全　年五月十五日出版
三重縣平民
著者兼出版人　古市與一郎
伊勢國河曲郡十宮村十番地
定價金壹錢

（註）本書ハ一九三五年日本昆虫学会ノ複寫ニ係ル寫本ナリ

D
8-3
114